

砂と暮らし 砂に学ぶ

ITP
だより

11

3月上旬から植生調査が始まった。調査地のマトマタ山脈は、チュニジア南東部から隣の国リビアまで続く標高500〜600mほどの山脈である。日本で山と言えば、緑色の葉を付けた木がたくさん生い茂っているイメージがある。しかし、ここでは高木はほとんど生えてお



マトマタ山(チュニジア)での植生調査。一年草植物の識別をしているところ

マトマタ山での植生調査

ず、低木と雑草が大半をしめているか、岩が露出している場所がほとんどで、遠くから見たらただの岩山にしか見えない。

50年前の植生図を見ると、この地域にも昔はヒノキやマツが生えていたことがわかった。その木々がなくなってしまう主な原因は人々による過剰伐採。過去の人々は切った分だけの木を植え直すということはしなかったのだ。

しかし、近年では学生による植林イベントや政府の緑化政策、研究者による試験植栽などが活発に行われているおかげで徐々に高木が増えてきているようだ。数十年後にまたここを訪れた時、マトマタ山が緑豊かな山となっていればいいと思う。

(鳥取大学大学院農学研究科学生
源実恵)

(水曜日に掲載)

ITP (若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム) 国際的に活躍できる若手研究者を育成することを旨とし、日本学術振興会が支援する事業。